

# 三才児を迎えるとき



星野三和子

今日は入園式、子どもたちのようすも、子鳥組（三才児三十名のクラス）では、大半が、「待ちに待った日」と言うよりはどうか、「不安とおどろきの朝」と言った顔つきである。お部屋（保育室）に入ってお友だちといっしょに「むすんでひらいて」のお歌を唱って、はじめて、なにかほっとした喜びと嬉しさが、子どもたちをつつんで、先生も、やれやれと一息つく。多くの配布物に多少退屈なようすもみられたが、通園ブックの蝶の貼紙と、赤いさくらの花の名ふだは、どの子の興味もきそつたらしい。今日はお母さんといっしょなので泣き出す子もなくみんな楽しそうにお部屋を出て行った。——これはある年の四月に三才児のクラスを受け持った最初の日の記録の一部です。

こうして入園式も終えた子どもたちは、ある子は喜び勇んで、ある子にははにかみながら翌日から登園して来ました。早い子で四

才ま近、おそい子では満三才の誕生日を迎えたばかりなのです。

こんな幼い子どもたちが家庭の周辺から幼稚園へと移って来て、ただ珍らしさ嬉しさだけから、良い面だけを吸収し、日々成長しているとは思えないのです。どこの幼稚園でも入園当初は保育時間も短かい。保育内容も子どもの毎日の生活に即したものを、おもしろく、たのしく、興味をきそつるように保育者が知恵をしばってアレンジしたものを用意しています。子どもにとっても、大きな声で歌が唱え、大好きな飛行機やヘリコプターのまねをしてお友だちと部屋中を走りまわり、ま新らしいクレヨンを使って好きな絵がかける、こんな嬉しいことはありません。しかも、そんなに喜んでいたはずの幼稚園も、十日から二週間も経つとぼつぼつとお休みする子が必らず毎年出て来ます。もちろん、疲れが出てきたしるしです。そしてその頃になると私はいつ

も、どの子にとっても心身の疲れを後々まで残さないような保育内容を考えたい、と思うのです。一年保育の子どもとこの子たちとは二年間の隔りがある。決して決して同じ気持ちで、登園してくる子を迎えてはならないと思うのです。ちょうど一才のお誕生日を迎え、よちよちと歩き出すか出さない位の子との隔りと同じだけのものを持っているのです。どうしたら余分なつかれを残さないような保育ができるでしょうか。先ずこの年令の子どもの自然の姿をつかみたいと思います。これは児童心理の本にも、保育雑誌にも出ていることですが、次にしなければならぬこと、それは自分のクラスに通ってくる一人ひとりの園児の姿を知ることだと思つて努力しています。その土地によつても大きく違つて来ますが、この社会的な地域環境は、保育者自身が通園している間にその園の周辺の状態から自然と体得していると思ひますが、三才位の子についてですと、どうしてもその子の生育歴というものを、できるだけ詳しく知るといふことが、保育者にとつては、より重要な意味を持つように思ひます。

幼稚園はもちろん集団活動の場です。そして保育者はクラス全体のバランスとすることをもつとも考えないわけにはまいりません。その日、その週、あるいはその月のカリキュラムをきちんとして家庭にも連絡しておくことが望ましいと思ひます。しかし良いクラスと言うものは玩具箱につききを入れたようにきちん

折り目正しい、おきょうぎのよい子ばかりのクラスを指しているとは誰れも考えません。もつともつと二人ひとりの子どもの特性を尊重し、すべての子どもの発達段階に即した保育環境を用意してあげることが望ましいと思ひます。三才では、地方によっては、今までクレヨンを持ったことのない子もいるかも知れません。そんな子にいきなりなにか書きましようと言つても、無理と言つものです。そういう子は最初の日にはそれこそ、撫でたり、さすったり、ほほずりしたり、それだけでもう充分だと思ひます。しかし一方では、一才前後からクレヨンに親しんでもうかなり人物らしいものを書いたり、お話しながらどんどんとクレヨンを動かす子もいると思ひます。そんな子は、白い紙の上に自分の心が表現できなければ、それがたとえ新しいクレヨンであつても、一向に価値のないものとして終つてしまひます。

どんな子どもにでも適合する保育環境、柔軟性のある保育環境、これが私どもの理想です。特に年少であつて、はじめて幼稚園に来て、先生のすることお友だちのすることがみんなもの珍らしいことであつて自分でできないことであつたら、初めの数日間には物珍らしさから喜んでますが、しまひには必然的に幼稚園を好まない子になつてしまひます。

最初の日記の中の「むすんでひらいて」これは日本の子どもであつたら殆んどの子どもが一度は耳にしたメロデーでしょう

し、歌の得意でない母親でもいつかは子どもに聞かせてきた歌だ  
と思います。その意味から、子どもにしてみれば、自分でも知っ  
ているうたをうたったと言う喜びがあったのだと思います。

園長先生の顔もはじめて、受持ちの先生のお話もはじめて、い  
くら母親がそばで「あれがぼくの先生なのよ、お母さんに言うよ  
うになんでもあの先生にお話するのよ」と言っていて聞かせても、全  
然自分とは手をつないだこともない人でしたら、どんなに優し  
うに見えても緊張はほぐれません。それより実際に「先生といっ  
しょにうたをうたった」「帰りに握手をした」と言う経験のほう  
がどれほどその子の緊張をほぐし、心に安心をもたらすか分りま  
せん。子どもとの距離を消すこと、これも最初の日から心がけた  
いことの一つだと思います。話しは変わりますが、先日私は米国のバ  
ーネット夫人の「秘密の花園」を読んでいる、幼稚園における保  
育者としてまた、母親として深く心をうたれました。

インドで生まれたメアリと言う女の子は、とてもわがままな子  
でした。ある時コレラで家族のみんなが一晚の中に死んでしま  
い、ひとりぼっちになったメアリは、イギリスのおじさんの屋敷  
にひきとられてきました。そしてそこで親切な召使いのアーサー、  
動物好きのディッキンという男の子とも仲よくなり、そこのお屋  
敷の病気の男の子（コリン）を秘密の花園へさそい出し、その中  
で楽しく遊びまわります。こうしてメアリもコリンも、すっかり

健康になり、すなおな心を持つようになって行くのです。

この一編を読みながら、改めて私は考えました。幼稚園はこん  
な花園に通じるものでなくてはいけない。もし幼稚園がすべての  
子どもにとって秘密の花園に値するものであったらほんとうにす  
ばらしい。心の底から自然の偉大な力に驚嘆し、全精神を美しい  
花への愛情としてそそぎ込み、総てをいつくしみ、うけ入れ、そ  
んな園の中で毎日育って行くこと、これは一種の夢のような気も  
しますが、又心がけ、ついで、どんな貧しい環境の幼稚園でも花園  
に化す可能性が充分に考えられる”とも思います。

要は、三才程の幼ない心に最後まで苦痛を感じさせるような保  
育内容は絶対にあってはならないと断言します。

先ず幼稚園が好きになり、朝早くおきて、さっさと登園の準備  
をし、笑顔で家庭を出てくる子どもは、幼稚園にきてから、ほん  
やりと部屋の前すみに立っているはずがありません。いち早く  
環境の中にとび込み、自分の遊びを次から次へと発見して行きま  
す。こうなったら保育者はただ見守るだけで充分だと思いま  
す。子どもたちの発見した秘密の世界は大切に守ってあげたいと思  
います。ロケットの好きな子はたった一本の組み木にまたがってい  
るだけでも月の世界を旅行しているかも知れません。ことばで話  
かけるよりは、その得意顔から読みとる方が保育者自身もどれ程  
楽しいことか分りません。

（東京・三河島幼稚園）